

あろう。

一〇 緊急発掘調査された古墳

野添遺跡

県道大久保犀川線道路改良工事によって平成八・九年度に発見・調査されたものである。町南部の鉄甲帽山から派生する小支丘上に位置し、最高所の標高は五五^{メートル}を測る。四基の古墳などが調査された。

一号墳

墳 丘 南半分が破壊されていたが、直径あるいは一辺長八^{メートル}の円（方）墳に復元できる。盛土は〇・五^{メートル}ほどに過ぎない。

主体部 中央部に厚さ二〇^{センチメートル}ほどの扁平な石材を長辺に左右五個並べ、頭位の小口には板石を立て据え、足位の小口には木板を立てたような痕跡があった。このままの高さでは遺体を埋葬できないことから、半円形に近い木蓋で覆ったものである。特殊な木棺であったと思われる。周溝から畿内系の直口壺が出土したが、主体部内は無遺物である。

二号墳

墳 丘 一号墳の南西、三号墳の裾にある。周溝は西側をコ字形に巡るが、その内側長は六^{メートル}に過ぎない。一号墳の尾根線上に位置する南側は幅五^{メートル}ほどの幅広いものとなり、ここから土器や砥石が出土した。主体部はコ字形周溝の中央付

近に箱式石棺が配置され、その足位（南側）に斜交して石蓋土壙墓が置かれていた。盛土はほとんど確認できない。

主体部 箱式石棺は長さ一・八^{メートル}、幅〇・二^{メートル}・四^{メートル}、高さ〇・二^{メートル}の規模をもち、頭部には粘土を用いた枕が設置されていた。石蓋土壙墓は素掘りの穴（土壙墓）を石で覆ったもので、長さ一・二^{メートル}、幅〇・三^{メートル}弱、高さ〇・一^{メートル}ほどの規模である。両者ともに内部に副葬遺物はなかった。

三号墳

墳 丘 最高所に位置し、この古墳群の盟主墳である。部分的な調査であるが、一辺長一二^{メートル}ほどの方形に近い形状となるようで、傾斜の急な斜面の一部を除いて幅二・五^{メートル}の周溝を巡らせる。盛土は〇・五^{メートル}ほどである。主体部は木棺と箱式石棺各一基で、周溝内でも箱式石棺一基が発見された。また墳丘裾付近から土師器壺が出土している。

主体部 木棺は中央部に置かれ、長さ二・八^{メートル}、幅〇・八^{メートル}、高さ〇・四^{メートル}の箱形と推測され、粘土で目張りされていたようである。棺内の足下付近から鉈が出土している。箱式石棺はやや脇にあつて、木棺とは主軸がずれている。長さ二^{メートル}、幅〇・四^{メートル}、高さ〇・三^{メートル}の規模で、やはり頭部に粘土で造った枕が置かれていて、その脇に鉄斧があつた。棺内から歯と大腿骨が出土し、三十代の男性かと推測されている。

四号墳

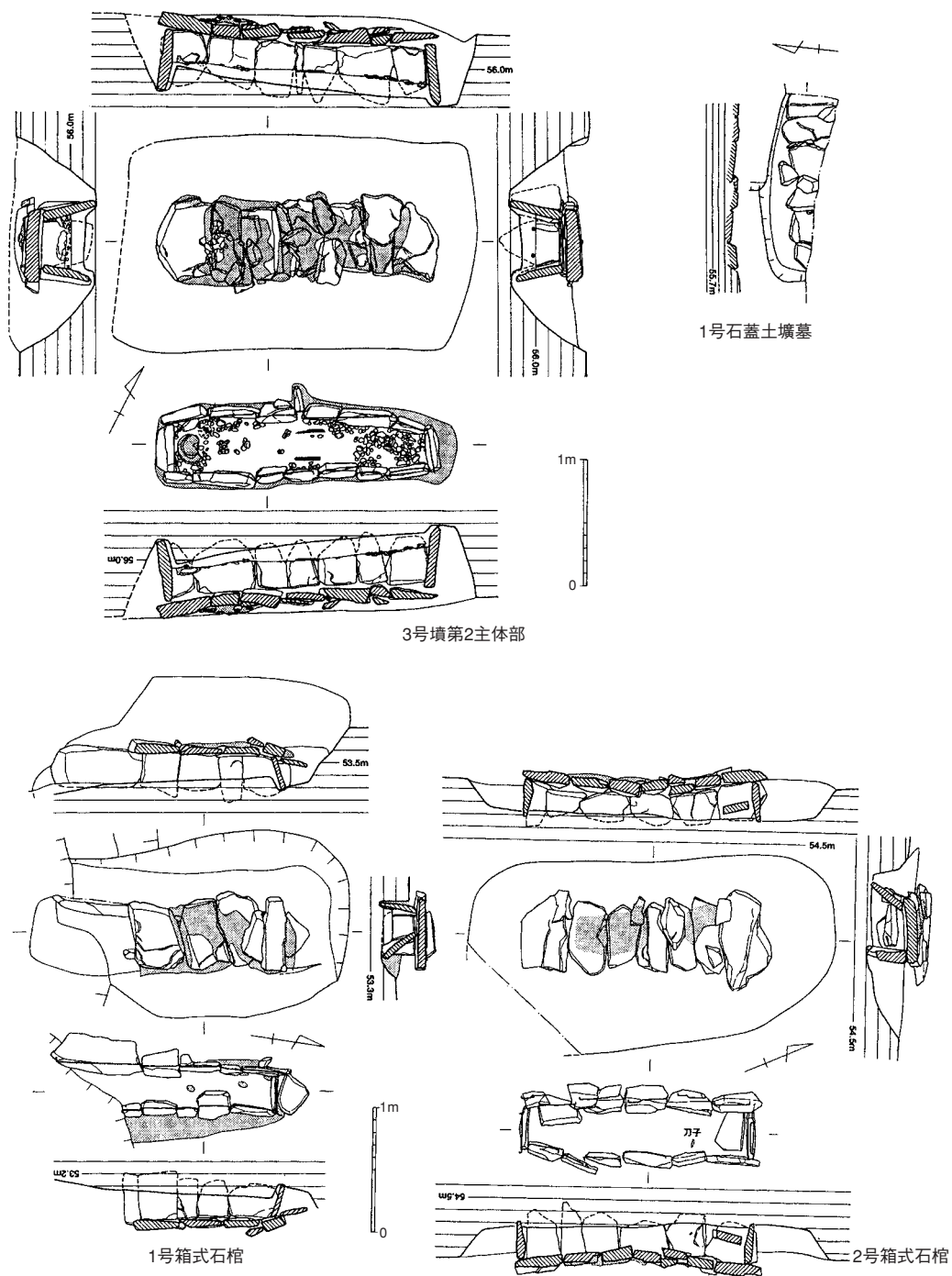


図2—148 野添遺跡2
(福岡県教委報告書より)

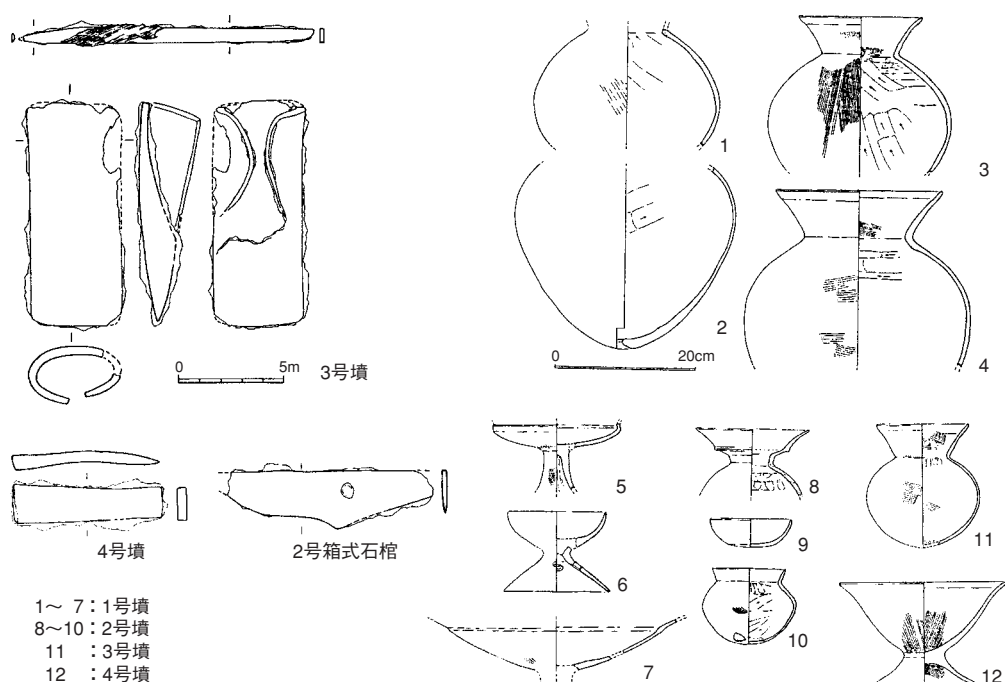


図2—149 野添遺跡3（福岡県教委報告書より）

墳 丘 三号墳の北側に位置し、一・二号墳とは尾根線

が異なる。周溝を検出したが形状が不整で、周溝内側から主体部の箱式石棺までの距離は〇・三メートルに過ぎないなど明確な墳丘を意識したようには見えない。

主体部 箱式石棺は石材が抜き取られた残骸で、長さ約一・七メートル、幅〇・四メートルほどと推測される。周溝から土器が、主体部内から板状の鉄製品を出土している。

以上のほかに、二・三号墳の間で一号箱式石棺、三号墳周溝内で二号箱式石棺、三号墳西側で一号石蓋土壙墓が発見されている。いずれも遺物はない。

以上の古墳群は古式の布留式土器を出土する町内最古の古墳で、当時の小地域の支配者層の墳墓である（福岡県教委「野添遺跡」『福岡県文化財調査報告書』第一四一集、一九九九）。

箕田中原古墳群

長川から上野への町道を挟んで、大字境付近の丘陵上に直径一四メートル前後の円墳が十数（一九六八・九）、牧草地の開墾によって多くが消滅したが、故定村責二らの懸命な調査によって一部ではあったが貴重な資料が残された。

一号墳の主体部は長さ二・三メートル、幅〇・八五メートル、高さ一・一メートルで、西側に開口する。**二号墳**は同じく長さ二・六メートル、幅一・一五メートル、高さ一・六五メートルを測る。

六・七号墳は破壊された石室の敷石から長さ二・三メートルほど、幅〇・八五〇・九メートルの規模で、東西方向に位置していた。

八号墳は破壊前に詳細な調査が実施された。それによると石室は長さ二・三三メートル、幅は奥壁で一・二メートル、入り口付近で〇・七二メートルの羽子板形の平面形となり、高さは〇・八五メートルが残存していた。南北両側壁（長辺）は内側へ傾斜する割石小口積みで、奥壁は高さ〇・八五メートルの比較的大型の石材二枚を腰石とす

る。四壁はすべて赤色顔料（ベンガラ）で赤く塗られていた。西側に開いた入口には袖石・框石を置き、その前面を長さ一メートル、幅〇・六四メートル、厚さ〇・二四メートルの花崗岩の一枚石で塞いでいた。それに続く墓道は短く、強い傾斜をもつ。

出土品は石室入口付近に太刀一点、剣一点、蔵手という特徴的なものを含む刀子数点、鉄鏃二点以上、鉋一点、鉄斧一点など、図A・B付近で碧玉製管玉四点、ガラス玉二点などがあ

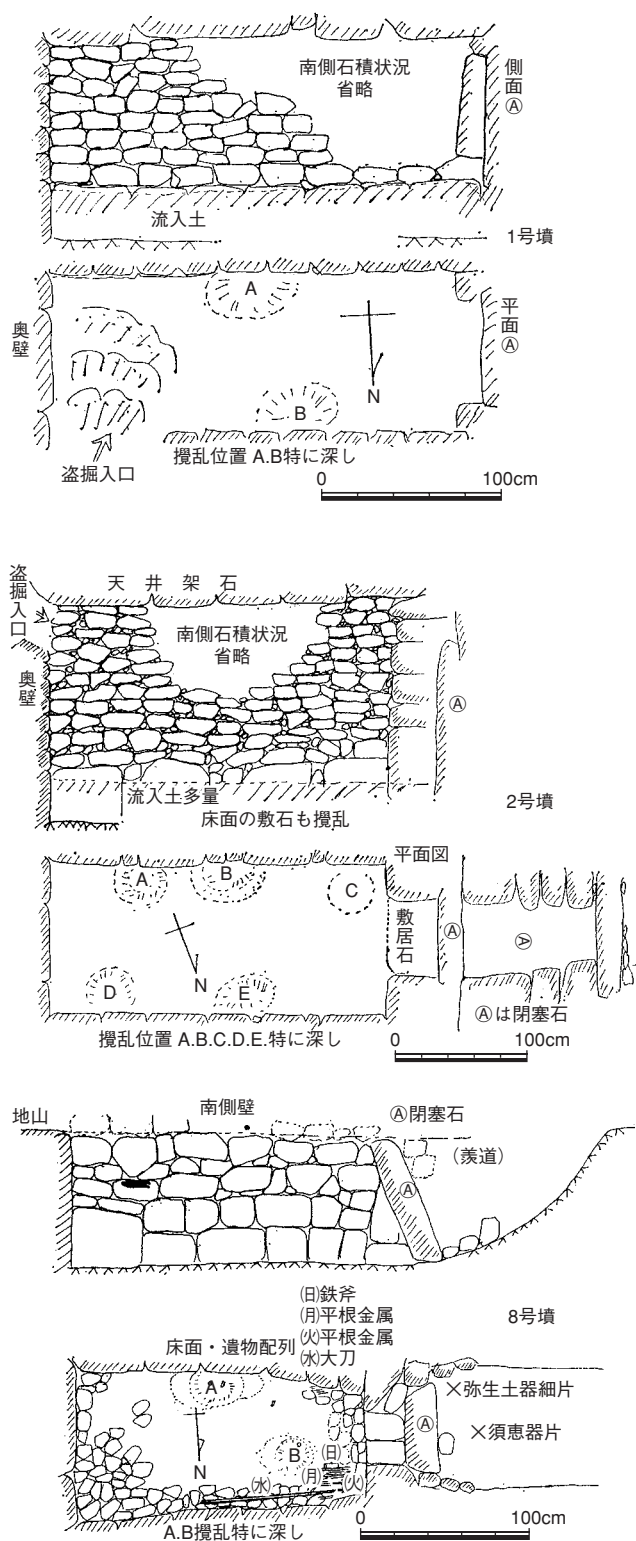


図2-150 箕田中原古墳1
(定村貢二報告書より)

九。

(定村貢二「箕田中原古墳調査報告」『美夜古文化』No.19、一九六

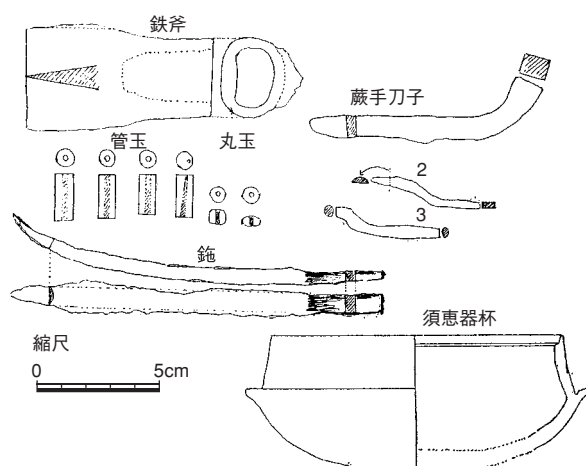


図2—151 箕田中原古墳2 (定村貢二報告書より)

り、そして閉塞石の前面で須恵器杯を出した。

これらは堅穴系横口式石室と呼ばれる、比較的初期の横穴系の埋葬部であり、町内ではほぼ唯一の調査例である。

五世紀後半でも終わりに近い時期から六世紀前半ごろに造られたものであろう

亀田道古墳群

平成二年度(一九九〇)採土工事に伴って崩壊の危険が生じたために横穴式石室をもつ四基の古墳を発掘調査した。

一号墳はほぼ玄室を残すのみで、平面形は長さ一・七メートル、幅一・九メートルほどのほぼ正方形となる。四周の腰石は袖石と高さを揃えていて、その高さは一・一メートルほどとなり、更に一・二段を積み上げて最大で一・五メートルの高さの空間を作っている。な

お、墳丘の規模は直径六・八メートルほどの円墳に復元されている。出土品は江戸・明治の古銭のみである。

二号墳は一号墳の上に堆積した土の上に造られていることから、一号墳より新しい。これは復室構造の石室で、やはり前半部を破壊されていた。玄室の規模は長さ・幅とも約二メートルで、一号墳とはほぼ同形同大となっている。前室の規模は不明であるが、幅は玄室と同規模である。これも直径一・〇メートルに満たない規模が推測されている。奈良時代以降の土器若干と江戸・明治の古銭が出土している。

三号墳は二号墳上に堆積した土の上に造られていて、二号墳より新しいものである。最も大きく破壊されていて詳細は不明であるが、先の二号墳と異なる長方形プランであった。出土遺物には金銅製耳環・水晶製勾玉・ガラス小玉各一点、土器類が数点出土した。土器の中で宝珠形つまみと内面にかえりをもつ杯蓋(最大径九・八センチメートル)、それとセットとなる腕形の杯身(口径八・八センチメートル)は器形が最も小型化する時期のものである。

四号墳は長径二・〇メートルに復元される円墳で、複室の横穴式石室をもつがこれも石室の破壊がひどい。玄室は長さ約二・五メートル、幅は奥壁で一・九メートル、玄門付近で一・五メートルといわゆる羽子板形となるが、意図したというより石材の形状に左右されたようである。前室は玄室に比べてかなり小型であるが、破壊のために規模などは不明である。

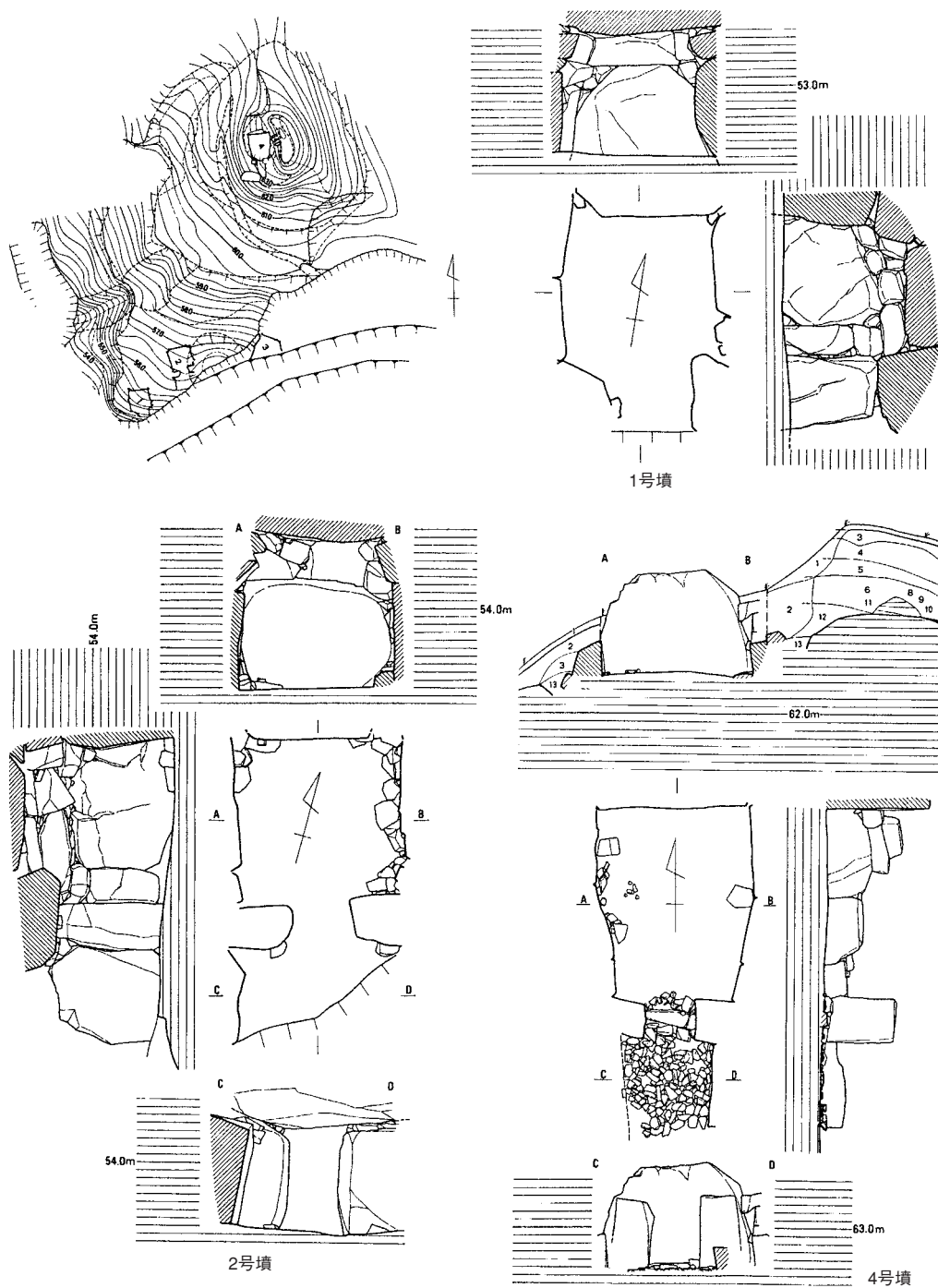


図2—152 亀田道古墳群1
(町教委報告書より)

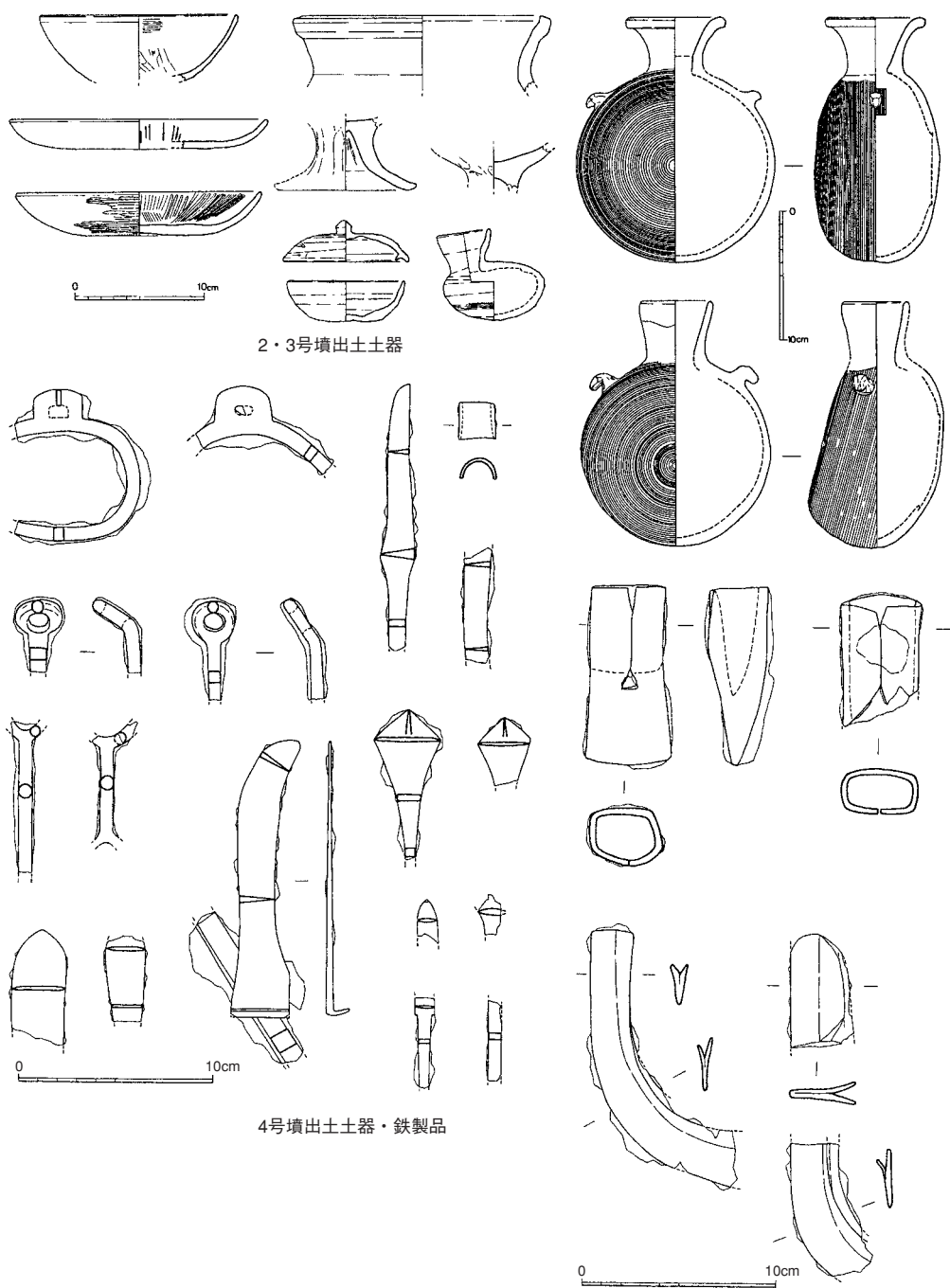


図2—153 亀田道古墳群2
(町教委報告書より)

玄室から各種の鉄製品（刀子・鉄鏃・鉄斧・鋤先・鎌・馬具）が、前室から須恵器提瓶二点が出土した。

六世紀後半から七世紀中ごろにかけて造られた群集墳の一部である（町教委「亀田道古墳群」『勝山町文化財調査報告書』第三集、一九九二）。

後野古墳

昭和五十年（一九七五）、勝山プレス建設に先立って調査された古墳である。調査時にすでに墳丘はなく、石室の発掘・実測が行われた。玄室から馬具などが出土している。

主体部

全長六メートル余の複室の横穴式石室である。後室は幅二・二メートル六分と奥壁の幅が広くなり、長さは二・五メートルで奥壁幅とほぼ同じである。方形プランを意識したものであろうか。奥壁・左右側壁ともに大小二枚の腰石の上に、比較的大型の石材を垂直に積み上げる。前室は幅約一・五メートル、長さ一メートル強の規模となり、後室に比べて石材が小振りとなる。羨道部は石材が更に小型化し、天井石が置かれたものか疑問である。

出土遺物 一は鏃である。錆びて接合部が小さいが、全長二七センチほどに復元できる。刃部は幅一・八センチ、推定の厚さ〇・六センチほどの片刃となる。頭部は袋状となり、最大径は二・九センチを測る。

二は鉄製雲珠で、頂部に花形の鉄板が付される。丈の高い伏鉢の側縁は直立し、その下端部は段をもって厚くなるようであ

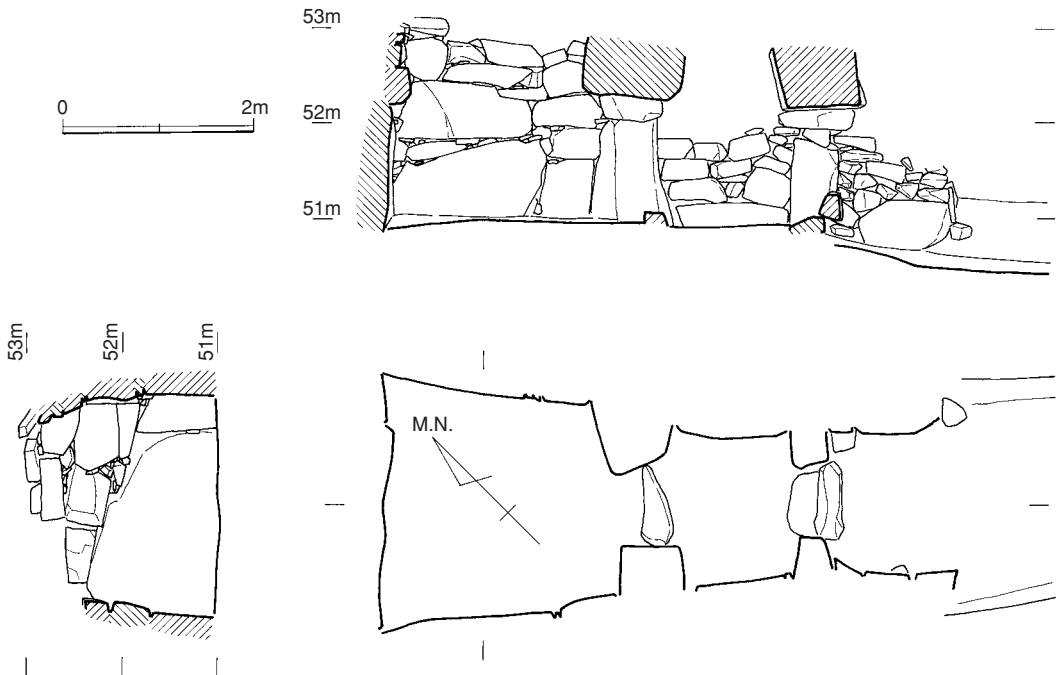


図2—154 後野古墳主体部実測図 (1/80)

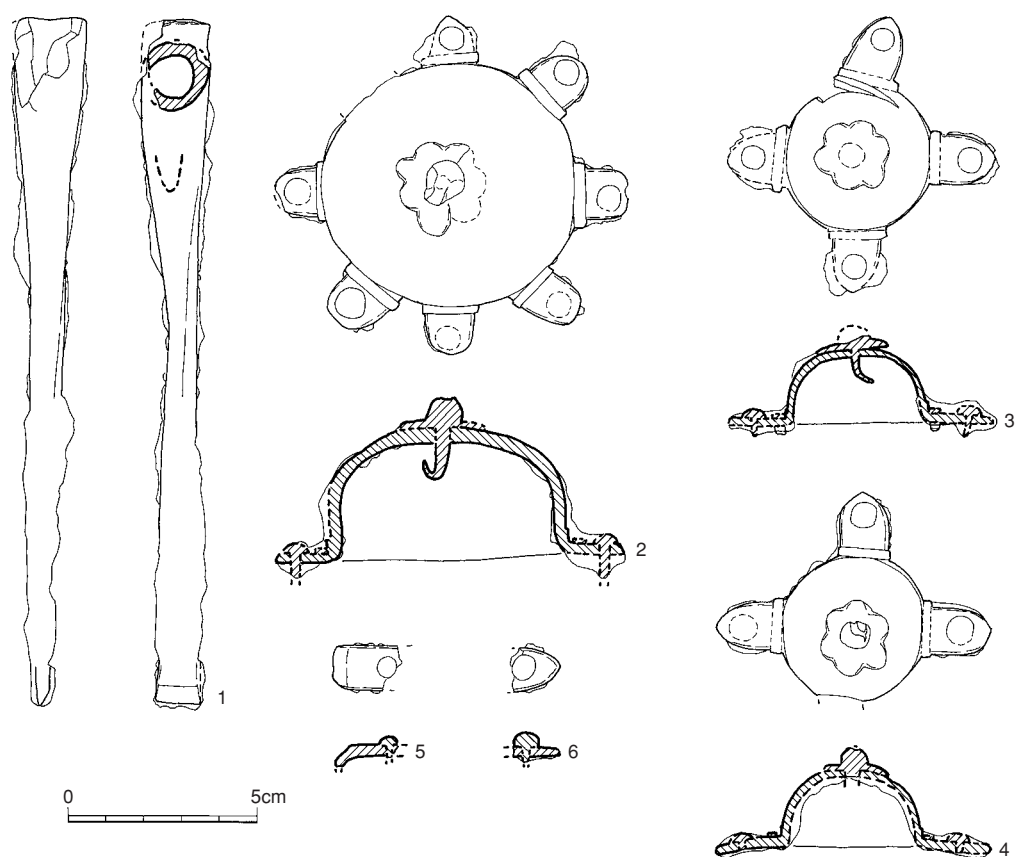


図2—155 後野古墳出土遺物実測図 (1/2)

る。八脚をもつが、その一つを欠く。金や緑青は全く見えない。三・四は雲珠とセットとなる辻金具で、脚の数や大きさが異なるほかは、材質・形状ともに同様である。五は一端が折り曲げられていたようで、六は図左側が尖って終わる。鋳に緑青が見え、本来は鉄地金銅張であった可能性がある。これらは同一の革金具かもしれない。

石室や馬具からみて六世紀後半に属するものであろう。

上久保古墳群

平成六年の県営基盤整備事業に伴い調査した。上久保集落の西側にあたる丘陵南側縁辺標高三四メートル付近に立地する。地形的には尾根筋から南方に突出した小支丘上に円墳二基が周溝が接するように位置する。

一号墳

墳丘 玄室奥壁側にあたる北西側が大きく削られており、墳丘高は周溝最下位との比高差で二・五メートルほどであった。直径は一三メートル前後、周溝は幅一・八メートル・三メートルが確認できた。墳丘裾から周囲一帯に中世の土坑墓が二〇基造られている。

主体部 残長三・六メートルの複室横穴式石室で南東方向に開口しており、楣石を残しすべて天井石を抜き取られている。羨道・前室に比べ玄室のみ大きめの石材を用いている。玄室は一辺二・〇メートルほどのほぼ正方形プランで敷石面

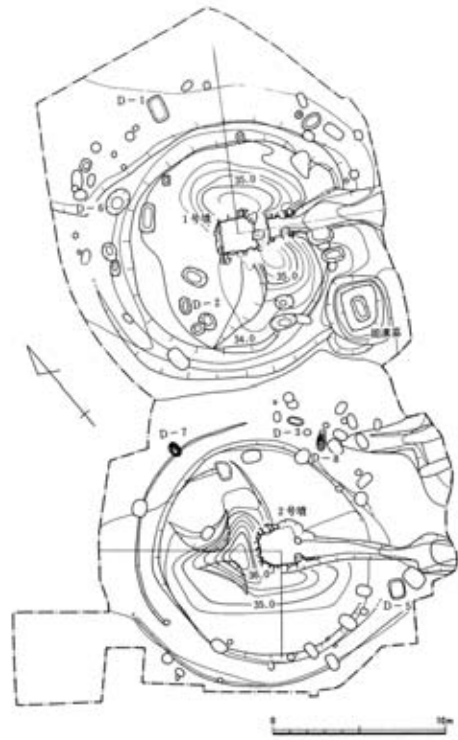


図2—156 上久保古墳群配置図 (1/400)

まで攪乱されていた。敷石の下に主軸方向の暗渠施設がある。前室は長さ一・〇メートル・幅一・二メートルの長方形プランで小礫を敷き詰めている。玄室からは中世の遺物とともに青銅製耳環、前室からは蓋杯・高杯・甕等の須恵器と鉄鏃が出土した。墓道からも蓋杯・甕・壺・平瓶・提瓶等の須恵器が出土している。

二号墳

墳丘

北東側三分の一が大きく削り取られ、そこで昭和三十年代まで火葬を行っていたとのことである。直径は一・二メートル程度に復元できる。北側で確認できた周溝は幅一・八メートル・五メートルであった。

主体部

墳丘の掘削が主体部の大部分に及んでおり詳

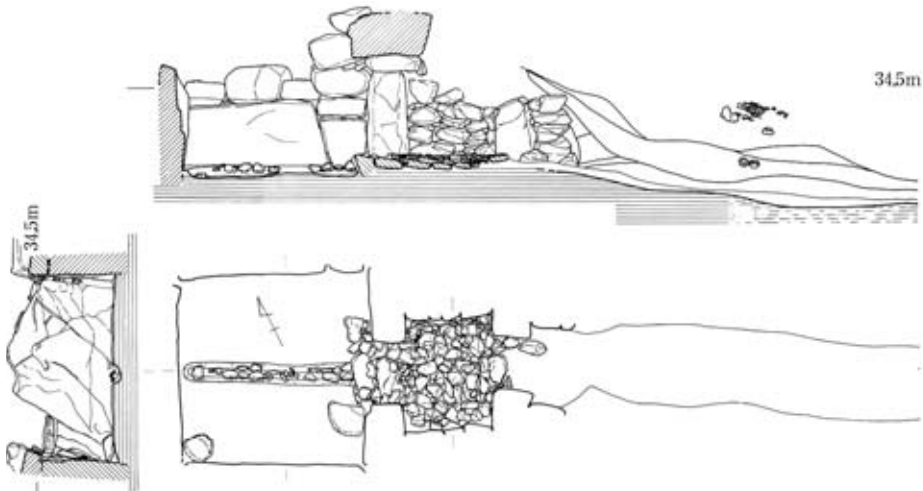


図2—157 上久保古墳群1号墳主体部 (1/80)

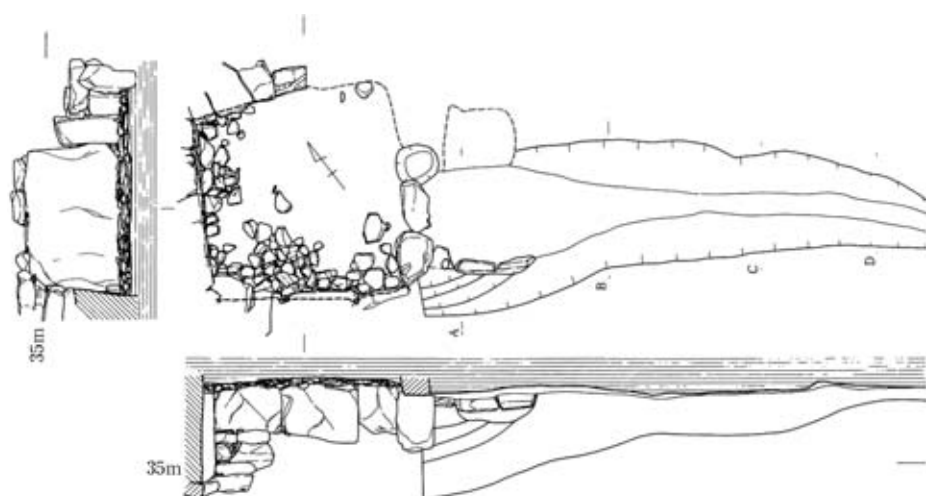


図2—158 上久保古墳群2号墳主体部 (1/80)

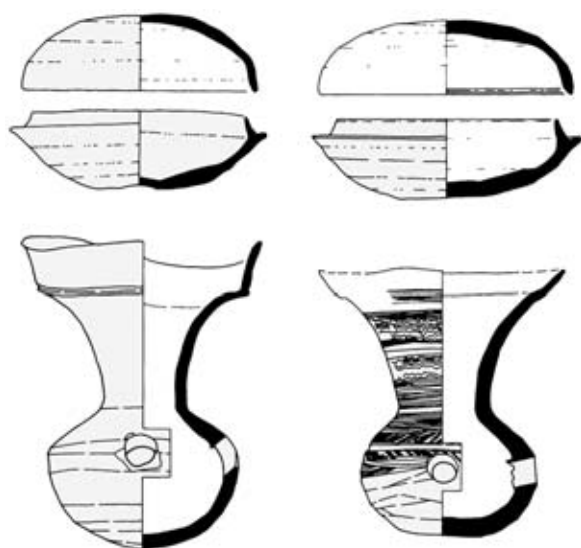


図2—159 上久保古墳群1号墳出土須恵器 (1/40)

細は不明であるが、単室の横穴石室で全長は三・三メートル前後となる。一号墳より少し南寄りに向かって開口するようである。奥壁・南西側壁ともに一・九メートルを確認でき、敷石の範囲から見て正方形プランであったと推定される。南側の袖石と框石が残っていたが袖石が玄室南側の隅に配され、羨道部の石材採取り痕や墓道と合わせて考えると玄門が西側二分の一に偏っていたと推定される。出土遺物は甕・平瓶等の須恵器片とガラス小玉、碧玉製管玉、鉄製刀子片がある。一号墳の出土土器から見て六世紀後半の築造であろう（勝山町教委「久保地区遺跡群Ⅰ」）

一九九九）。

大久保^{ほりお}掘生古墳群

平成七年度に県営基盤整備事業に伴う調査で新たに発見された古墳群である。上

久保古墳群と同一の尾根筋の約二〇〇メートル山側にあたる。丘陵上部の標高四〇メートル付近で古墳一四基を検出した。主体部は一号墳のみ竪穴式石室で、構造が確認できなかった一三号墳を除き全て石棺である。天井あるいは蓋石が残されたものはなく、周溝も部分的にしか確認できないため墳丘についてはほとんどのものが不明である。

一号墳は主軸を東南東にとり、主体部は長さ一・五メートル、最大幅〇・四メートルである。両短辺は板石を立てて用い幅〇・二メートルと狭くなる。長辺側は三、四段の小口積みでやや外傾している。二号墳は主軸をほぼ東西にとり、長さ一・七メートル、幅〇・五メートルで床面に小礫を敷き詰めている。三号墳は北側の一部を除き幅一・二メートルの周溝を検出した。周溝の直径は一〇メートル前後となり、把手付きの高杯が出土した。主体部は南東に軸をもち、中央で長さ二・〇メートル、幅〇・五メートルである。北東側の短辺壁際に枕状に扁平な石二枚を並べている。南東側長辺際の北端で鉄刀が出土している。四号墳は八分の一の周ほど残った周溝からみて直径八メートル前後の墳丘と見られる。主体部は大半の石材が抜き取られていたが長さ一・九メートル、幅〇・五メートルの床面には小礫を含んだ砂が敷き詰めてあった。五号墳は北側に残った周溝から墳丘の直径が六



図2-160 大久保掘生古墳群配置図

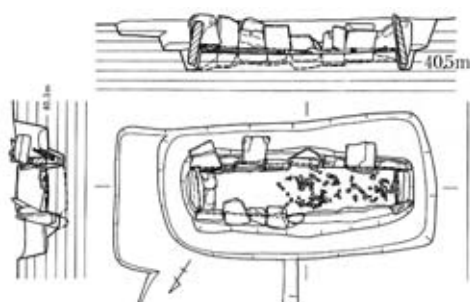


図2—162 3号墳主体部

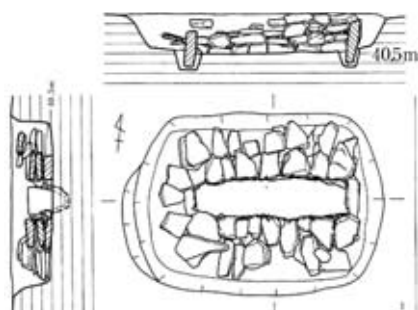


図2—161 1号墳主体部

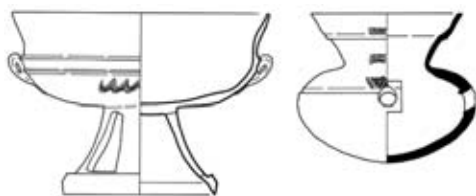


図2—163 3・11号周溝出土須恵器

五号ほど高くなる。七号墳は主体部のみで、長さ一・七メートル、幅〇・四メートルである。南西側短辺の石材に比べ他の壁の立石は低く、二・

七メートル前後となる。北北東に軸をもつ主体部は長さ一・七メートル、幅〇・四メートル、床面には小礫が敷き詰められ南西の短辺沿いが高くなる。両側壁上に天井懸架のための高さ調整と見られる石材が見られる。六号墳は南西半に周溝が残り直径五メートルとなる。主体部は長さ一・八メートル、幅〇・四メートルで床面は南西短辺側が

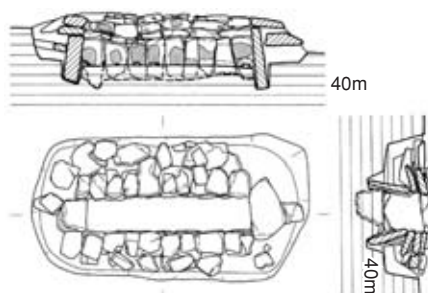


図2—164 7号墳主体部

ている。礫が敷かれた床面は長さ二メートル、幅〇・四メートルである。鉄鍬・刀子が出土している。一一号墳は北側に四分の一ほど周溝を残し、甕が出土している。墳丘の直径は五メートルほどであろう。この主体部も一石を残し石材が抜き取られている。床面は長さ一・六メートル、幅〇・五メートルである。一二号墳も主体部のみでほぼ東西に主軸をもつ。西側四分の一以外は石材を失い、床面は長さ一・七メートル、幅〇・三メートルである。一三号墳は周溝を残すが、主体部の構造が不明である。墳丘の直径は四・五メートル程度となる。一四号墳も主体部のみで検出で石材も一石を残すのみである。抜き取り痕の内寸は長さ〇・七メートル、幅〇・三メートルで楕円形に近いプランである。遺物が少量なので各古墳の時期は特定しづらいが、三号墳・一一号墳の周溝から出土した土器から見て五世紀代に

三段の小口積みを行い、高さを調整している。八号墳は主体部床面まで削平されており、抜き取り痕の内寸は長さ一・九メートル、幅一・一メートルである。九・一〇号墳も主体部のみである。九号墳は一石を残して全ての石材が抜き取られている。床面は長さ一・八メートル、幅〇・五メートルである。一〇号墳も北東半分の石材が失われ

営まれた古墳群であろう（勝山町教委「久保地区遺跡群Ⅱ」二〇〇〇）。

御手水原古墳群

平成八年度に県営基盤整備事業に伴い新たに発見された。初代川支流の宇田川北岸の丘陵南斜面に立地する。標高六七〇メートル付近で一二基の古墳を検出した。すべて単室の横穴式石室で、等高線に直交するように谷側の南東方向に開口する。開墾による削平が著しく、一・二号墳玄室を除き天井石は残されていない。墳丘後背面の切り離しも三・四号墳以外では検出できず墳丘の規模も不明で

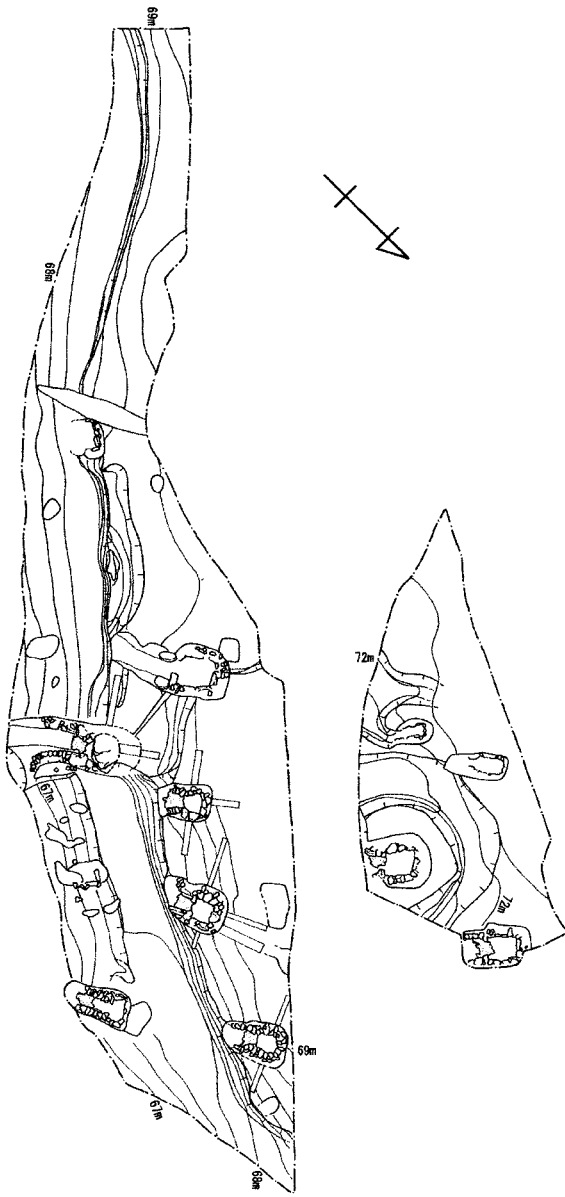


図2—165 御手水原古墳群遺構配置図 (1/400)

ある。以下に各主体部の概略を見ていくが、石室の数値は中心部分での数値であり、主軸方向の長さ、幅の順である。

一号墳は玄室が二・一・七メートルの長方形プランで、短い羨道がハの字に開く。石室全長は三・七メートルである。二号墳は全周に周溝が残り直径七・七メートル前後となる。主体部には敷石しか残らないが、腰石の抜き取り痕から見て一・八×〇・九メートルほどの長方形プランの玄室であろう。三号墳の玄室はほぼ二・〇×二・〇メートルの正方形プランである。石室の全長は三・三メートルで羨道は短く開くようである。墳丘は直径七・八メートルほどに復元できよう。四号

墳は〇・七メートル×〇・八メートルで奥壁側が広がる台形に近いプランである。腰石は高さ三・四メートルの石材を用いている。五号墳は長さ一・七メートル、幅は羨道側一・四メートルに対し奥壁では一・八メートルと台形プランである。羨道の西側は主軸に平行に近く、東側は開き気味である。六号墳は一・七メートル×一・七メートルと正方形プランの玄室に短く直線的な羨道がつく。石室の全長は三・四メートルで西側の貼石は墳丘裾に沿って回りこんで

ゆく。七号墳の玄室は一・三×一・七メートルと横長となる。南西側壁が奥壁側に入り込み平行四辺形プランとなっている。石室の全長は二・五メートルで、短い羨道は東側が開き気味である。八号墳の玄室は二×二メートルの正方形プランである。羨道部先端の抜取り痕から見て石室全長は四・六メートル前後であったようである。玄室の主軸に対して羨道部の軸が南側に偏っている。九号墳は奥壁の腰石と東側壁の抜取り痕、敷石の一部を残すのみで様相が明



図2-167 10号墳主体部
(1/80)

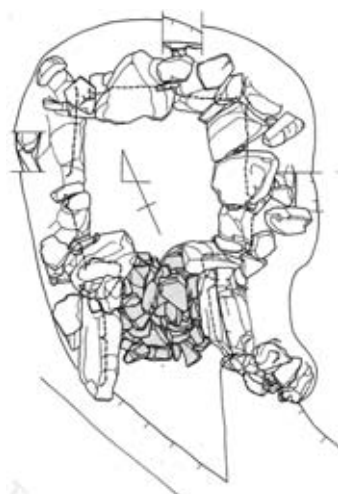


図2-166 6号墳主体部
(1/80)

らかでない。奥壁の幅は一・六メートルである。一〇号墳は特徴的で、〇・九×一・八メートルの明らかに横長プランの玄室である。石室全長は三・一メートルあり、羨道部が長い。一一号墳は玄室敷石と奥壁・東側壁の抜取り痕のみである。幅一・二メートル前後となるようである。一二号墳は本古墳群中ただ一基玄室天井石を残している。玄室は二・〇×一・七メートルの長方形プランで高さは一・五メートルである。石室全長は五・五メートルで、緩やかに開く羨道先端で墳丘裾に沿って回り込んでゆく。奥壁が一枚石なのはこの一基のみで、石材も古墳群中最大である。

この古墳群は出土遺物から見ると七世紀の半ばごろまで営まれたようである。

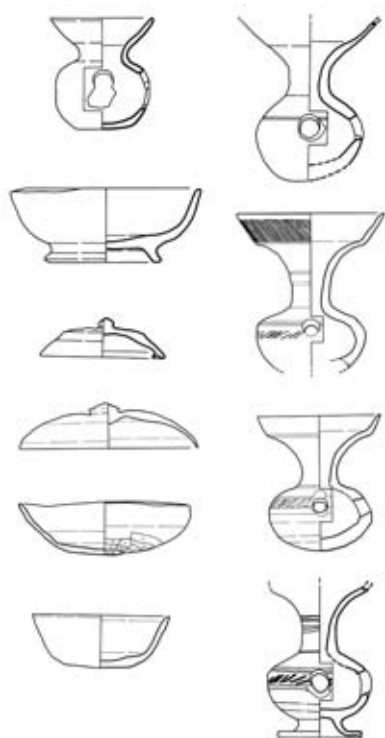


図2-168 出土土器 (1/4)

清地神社南古墳群

山山塊南端部から西に延びる支丘陵線の上に位置し、標高五〇メートル

個人の開墾に伴って調査した。長峽川と池田川の合流点のほぼ東に当たる。観音

付近に二基接するように築かれ、尾根筋に沿って作られた林道によって墳丘の南側裾が削られている。二号墳は更に開墾のため墳丘の北東側も大きく削られ、石室の一部が露出していた。

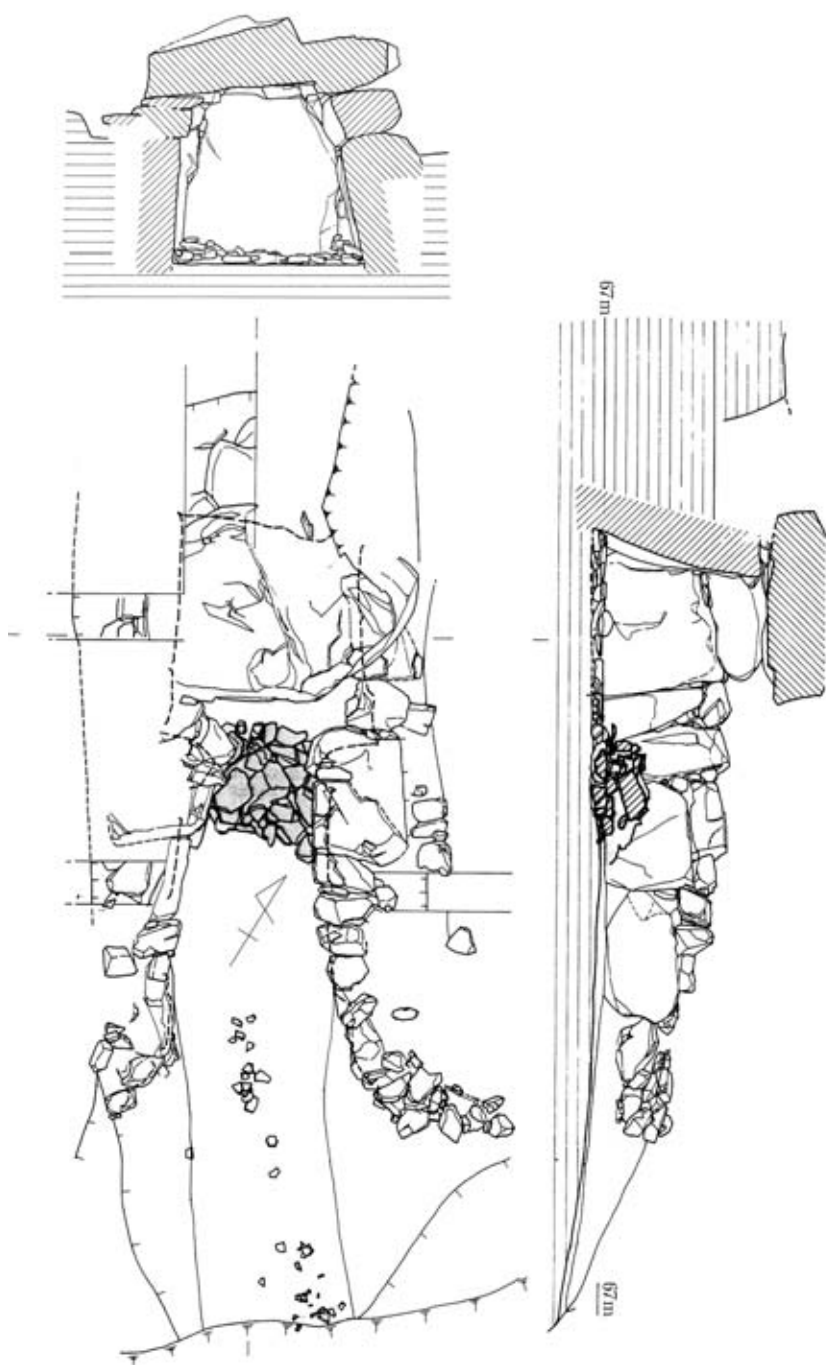


図2—169 12号墳主体部 (1/80)

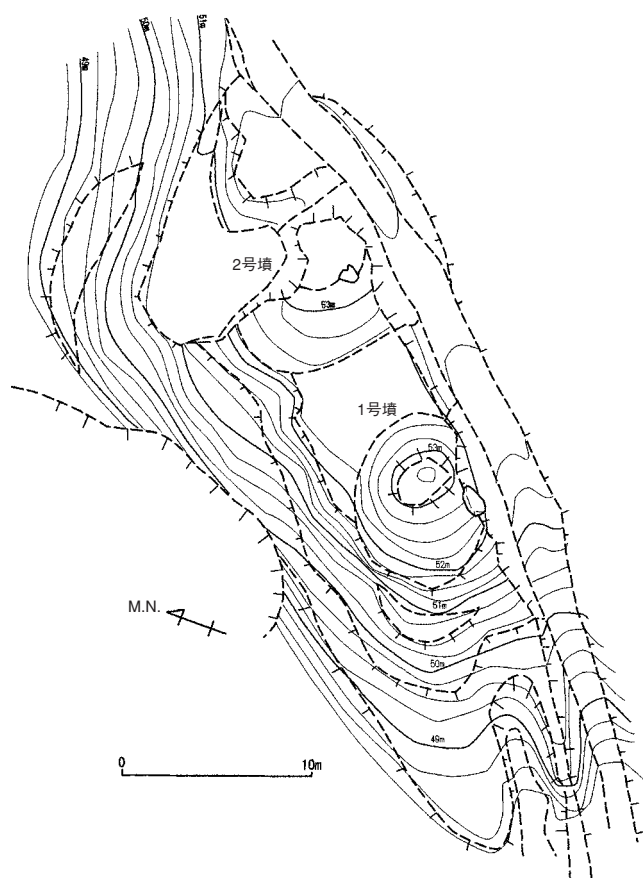


図2—170 清地神社南古墳群配置図 (1/400)

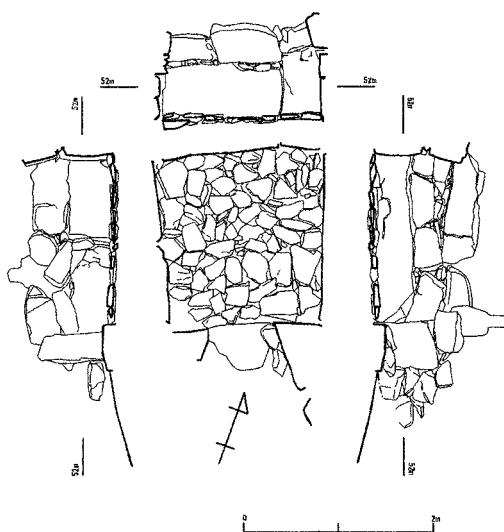


図2—171 1号墳主体部 (1/80)

一 号 墳

丘 立地が丘陵の先端近くの狭い稜線上のために墳

丘裾のラインがはつきりと分らない。一号墳の西側にテラスがあり、二号墳との間に残る周溝から見ると、形状は乱れているが直径八メートル前後の円墳となろう。

主 体 部 単室構造の横穴式石室で天井部を失っている。

主体部は若干北西に寄った主軸の単室で、玄室は長さ一・八、

幅一・七メートルのほぼ正方形プランである。腰石は奥壁と西壁では二石、東壁では一石でその上に二、三段残っている。羨道部は前面を失っているため詳細は不明だが玄門部から直線的に開くようである。玄室床には大きめの扁平な敷石が施され、中央から二振り、奥壁際から一振りの鉄刀が出土した。いずれも主軸に直交するように柄頭を西に向けている。その他にも鉄鏃や刀子等の鉄器が出土している。

二号墳

墳 丘 一号墳より更に激しく削られているが、一号墳

との間で辛うじて墳丘裾と見られる部分が検出できる。やはり直径八メートル前後の円墳となるようである。

主 体 部 これも単室の横穴式石室で、玄室は中心部で長さ二・一、幅一・九メートルである。玄門側幅一・六メートルに対し奥壁側では二・一メートルあり、台形プランとなっている。石材は一号墳に比べ小型で、残りのよい西側壁では腰石上に四段が確認でき

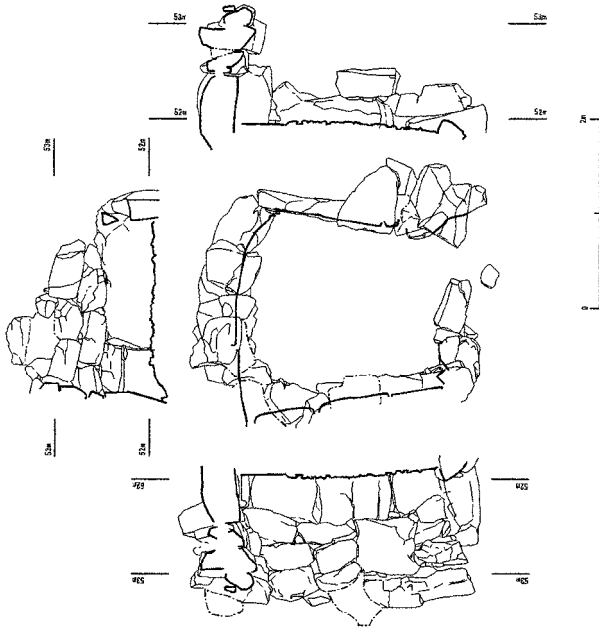


図2—172 2号墳主体部 (1/80)

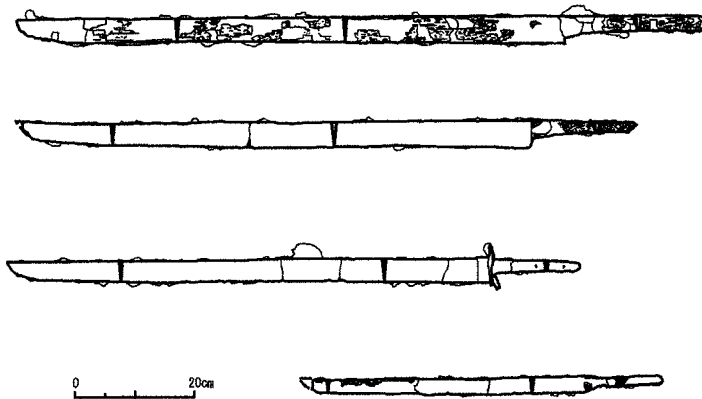


図2—173 出土遺物

る。床面には小礫が敷き詰められ、奥壁際から鉄刀が一号墳同様に柄頭を西に向けて一振り出土している。その他にも、鉄鏃・耳環八点や多数のガラス小玉が出土している。両古墳とも残念ながら築造時期を示す遺物は出土していない。